

科学研究費助成事業（科研費）の 制度改善等に関するアンケート調査結果のまとめ

科研費改革の影響や研究計画調書の様式の見直し等の改善状況、その他科研費制度において今後検討すべき課題等について、意見・要望等を聴取するため、下記の通りアンケート調査を実施し、主な御意見・御要望等についてとりまとめた。

- 調査期間:平成30年11月8日(木)～11月26日(月)
- 調査対象・方法:科学官13名、学術調査官(科学研究費補助金担当)24名にメールで調査協力を依頼
- 回答状況:科学官 8名、学術調査官(科学研究費補助金担当)13名から回答
- 調査事項:次の3つの事項について、自由記述で回答を求めた。
 - 「1. 審査方法、審査基準、審査体制等について」
 - 「2. 研究計画調書の様式等について」
 - 「3. その他(研究種目の在り方、科研費の使用ルール等)」

1. 審査方法、審査基準、審査体制等について

○: 好意的な意見

◆: 改善などを求める意見や要望

(1) 審査区分の大括り化について

○「基盤研究(S)」を大区分で、「基盤研究(A)」や挑戦的研究を中区分で審査するようにしたことは評価できる。大区分で審査されるということは、必ずしも自分と同じ分野ではない審査委員にも分かりやすく自分の研究計画を示さなければいけないということになるから、自分の研究の客観的意義の説明を常に心がけることに資すると思う。「基盤研究(B)」「基盤研究(C)」「若手研究」については、もし可能であれば、区分をもう少し減らすことも今後考えてほしい。より大きな区分にすることによって、情実や学閥などから自由な、研究そのものの評価がしやすくなるのではないか。

○専門家だけではなく、少し分野の異なる方からの評価は極めて重要。詳細は分からなくとも、文章からその本人の力量等は伝わるし、また応募者本人を知らない方が、名前に惑わされず、公平な評価に繋がる。応募者本人を知らない方が、名前に惑わされず、公平な評価に繋がると思う。

○科研費の規模に応じて審査区分の広さが比例していることは、狭い分野だけの審査ではなく広い視点で予算を学術的に見て有効に投資する意味でも適切と思われる。

◆「中区分」で審査を行う科研費については、合議審査の際、専門外の審査委員の意見が通りづらく、該当分野を専門とする審査委員の意見が尊重される傾向があるのではないか。応募書類は当該分野を熟知した者以外にも分かるように分かりやすく論理的に書かれている必要があるが、不十分な書き方でも応募書類に書かれている以外の内容について知識を有する審査委員の意見により、審査結果が左右されることがあるため、応募書類の内容だけに基づいて審査することを審査委員に徹底する必要がある。

1. 審査方法、審査基準、審査体制等について

(2)「総合審査」方式、「2段階書面審査」方式について

○同じメンバーで行う「2段階書面審査」方式も良い。全く知らない分野の審査では時には勘違いをしてしまうことがあり、その防止策としても効果があると思う。

○「2段階書面審査」方式の評判は良い。

○「基盤研究(A)」以上で採用されている「総合審査」は書面と合議を行う委員が同一であるため、かなり理想的な審査方式と考える。

○大型研究種目をヒアリングや合議審査で行う事は良いと思う。「挑戦的研究(萌芽)」は、金額的に考えて合議審査でなくて良いのではないか。

○「2段階書面審査」や合議制は、審査の公正性や透明性を高めるという意味で良い制度であることは間違いなく、多くの研究者にもそのように受け止められているようだ。

○同一の審査委員が「総合審査」と「2段階書面審査」を行い、1段審査の結果を踏まえて2段階目の審査を行うことができるようにしたことで、1段審査の結果と異なる評価をすることができるようになり、2段審査の意義がより大きくなった。

◆「基盤研究(B)」以上の審査は、審査委員が集まり、合議の上で最終的な合否を決めるほうが良い。

◆「基盤研究(B)」、「基盤研究(C)」、「若手研究」については、会議体としては合議をせずに効率化をはかるということだが、これについては若干の懸念を感じる。顔を合わせて多面的多角的な視点から話し合うことは合意を形成する上で非常に重要だと思う。また、そのことによってより妥当な結論を得られると身を以て感じている。特に、科研費の場合、当落線上の入れ替えなどは、話し合いが必須だと思う。

1. 審査方法、審査基準、審査体制等について

(3) 審査件数、審査負担軽減について

- ◆応募件数の増加に起因するものだけではなく、他の分野の審査をするという負担がかなり大きい。
- ◆1人当たりの審査件数が多すぎる。合議制の最終審査において、審査員の弁舌力によって審査結果が反転する場合がある。1人当たりの審査件数を少なくする。そのために、若手研究者を審査に加えて審査員を増やす。経験の少ない若手研究者には近い分野の審査委員とすれば審査ができる。30件程度であれば若手にとっては応募書類の書き方の勉強にもなる。100件では負担になり、若手研究者を疲弊させる。
- ◆書面審査に若手を導入してもっと人数を増やすべき。若手が審査する機会をさらに増やすのが効果的と思う。ただ、書面審査後の合議においては、近い分野の広範な世代の研究者が対面で公平な意見交換ができるとは思えない。
- ◆研究者個人にとって、または所属機関にとってのメリットがないと、引き受けてくれる人の質が担保できなくなる。一方で、応募件数が多すぎるという現実もある。科研費を受けた人は研究期間中に必ず審査委員を担う事にすれば良いのではないか。
- ◆評価が低い応募を除いて母集団をカウントすることにより領域ごとの不公平感が軽減されると思う。
- ◆長期的には、採択率などで大学や研究者を評価する流れになるよう文科省主導で変えていただけると良いと思う。より効果的な方法としては、研究機関内である程度応募を選抜できるようなシステムがあっても良いかもしれない。当初は様々な利害などが想定されるが、いずれは公正に研究内容や研究者を評価する仕組みや雰囲気づくりに貢献できると思う。

1. 審査方法、審査基準、審査体制等について

(4) その他審査に関する意見

- 「挑戦的研究」における、「概要を最初に出す」という審査方法はとても好意的に受け止められているようである。多くの種目でこの方法が取られるのが良いと思う。
- ◆複数の審査委員で採点がなされるわけだが、審査の点数の最高点と最低点は除外する方式にしてはどうか。
- ◆充足率については、文系理系、実験系非実験系、同じ数字を使うのではなくて、分野の特性に応じて多少変えても良いのではないか。
- ◆審査委員の名前が種目ごとに公開になり、誰が自分の応募書類を審査したかが明確にわかるようになったが、これは審査をする側もやりにくい。種目別の公開は止めるべきと考える。
- ◆審査時に打ち込むコメントを、すべて応募者に返すのが最も有意義ではないか。もちろん、おかしなコメントが応募者に届いて、疑義申し立て、となるリスクも出てしまうが、それも含めての審査が透明になると思う。
- ◆「新学術領域研究」などの評価結果について、中間・事後評価を受けた研究課題のうち、高い評価であった研究課題については、中間評価であれば研究期間の延長を、事後評価であればその後継研究(後継の定義は容易ではないようにも思う)を優先的に採択していく仕組みがあっても良い。
- ◆全ての種目について、採択に至らなかった課題の上位5~10%程度について、次年度、コメントに対する改善点などを適切に対処することで採択にできるなどの柔軟性があっても良いと思う。種目によらず、このような方法・仕組みづくりをする価値はあるように感じる。なぜなら、審査委員、応募者双方の負担軽減につながると考えられる。しかし、延々と続けることはできないので、不採択後1回のみその修正された提案書での審査を受けられるとすれば良いと思う。

2. 研究計画調書の様式等について

(1) 研究業績欄の見直し等について

○枠がなくなり書きやすくなった。

○枠線がなくなり研究計画調書作成の労力が削減されたことは大きく評価できる。

○論文業績に頼らない調書は良いと思う。その研究課題に関係の無い論文を掲載されても見抜くことは難しく、やはり準備状況の評価に重きを置くことが重要と思う。

○研究代表者および研究分担者の研究業績欄を評定要素に合わせて「応募者の研究遂行能力及び研究環境」に変更されたことは、研究遂行の実行可能性を判断する上で、従来の業績主義に(それほど)とられずに適切に判断できる可能性を増やしたといえる。

○業績欄の変更は戸惑ったが、無関係の業績を並べて、数で競うのは無意味なので、良かったと思う。

◆記入要領で、業績を書くことが明示されていないので、業績を書いてはいけないと誤解した応募者がいたと思う。「業績を引用して研究遂行能力を記述してください」などの指示があると良い。

◆準備状況を知るには従来の業績を見るのが一番確実。業績主義を取らないということはそれとして分かるが、単なる思い付きではなく着実な研究成果が見込めるということは審査において重要な要素なので、業績を精選するように改善して、新たな業績欄を作ってほしいと思う。

◆遂行能力を評価するために、適切な量の研究代表者の主要業績(論文、招待講演、学会発表)は必須だと思う。極端な場合として、挑戦的研究を除いた種目では、実績がほとんど無い研究者に貴重な税金を使って本当に研究を託してよいのだろうか？分野によって成果の出やすさやスピードに差がある点は理解しても、論文、招待講演、学会発表の業績が5年程度無いことは、研究成果が出せていないということである。仮に、これまでとは方向性が異なる研究を進める場合であっても、これまでの実績は研究遂行能力を評価する上で重要と思われる。

◆業績欄がなくなったことで、若手は書きやすくなったが、反面、実力がなくても判断できない。

◆新たな試みを行って科研費制度を改善しようとしている試みは理解できるが、様式に、毎年、変更や微調整を加えることはやめて欲しい。

(2) researchmapとの連携について

○researchmapの使用について、感触として、審査でresearchmapまで見ることは少ないのではないかと思うという意見が多い。ただ、私個人の意見としては、以前の様式でも研究提案に関係のない業績もリストアップされているように思われるケースも多かったので、現在の書式のように業績を書くスペースが限られることによって本当に必要な業績だけが書かれることが期待できるのではないかと思う。

◆業績の参照にresearchmapを使うようになったのは、応募者のコストを減らすという点では良いが、それを参照する手間を審査委員にかけており、審査側にとって無駄な負担増だと思う。researchmapの内容も応募書類に含めるべきだろう。たとえばresearchmap上の記載内容を科研費電子申請システムに自動変換するような仕組みにできないか。

3. その他(研究種目の在り方、科研費の使用ルール等)

(1) 若手研究者への支援について

- ◆若手優遇の科研費の種目を増やしたことは評価できるが、このためにシニアの研究者が大型科研費を取得しづらくなった面もあると思う。若手向けの少額の科研費はかなり充実してきているので、これ以上増やしても、若手にとっては大きなメリットにはならないと思う。若手が自分の給料を申請できる制度を導入するか、シニア研究者が若手研究者の雇用経費を出せるような大型科研費を増やして欲しい。更に、もっと本質的には若手研究者を安定して雇用できるシステムが必要である。
- ◆「若手研究」の拡充は当然必要だが、「若手研究(A)」の「基盤研究」への統合は見直すべきという意見をよく耳にする。私も、次世代の研究者の芽を研究者コミュニティ全体で育てる観点から、「若手研究(S)」の復活も含め、優れた若手研究者を科研費で育てる体制を再度構築すべきと感じている。
- ◆若手研究者の独立を支援するための経費は、必ずしも「若手研究」とリンクさせてなくてもよいと思われる。「基盤研究(B)(C)」あたりとリンクさせてもよいはずである。あるいは、独立した「若手研究独立支援」のような経費を設け、積極的にこれをサポートする姿勢を国として示した方がよいと考えられる。
- ◆定年退職後、あるいは定年間近の高齢研究者が、高額な研究費を取り続けていることが、若手の育成を阻み、わが国の科学的競争力を低下させている最大の問題である。この問題に対して、真摯に対応すべきである。

(2) デュアルサポートについて

- ◆研究遂行のための施設改修・什器・浄水器などの汎用機器更新は運営費交付金・間接経費・寄付金で購入することを求められているが、いずれも研究者への配分が減少してきており、研究遂行に支障がでている。従来、基盤的経費による支出しか認めなかった項目に対して競争的資金による支出を可能にしてほしい。
- ◆挑戦的研究に対する支援策の充実が図られているのは好ましい事と考える。しかし、そもそもこの種の基盤経費については、どのように科研費で補おうとしても難しい側面があるのは否めず、競争的資金で代用するのは最良の方策とは限らない。期間内に具体的な成果が上がるような目標設定を求められる競争的資金だけでは、長期にわたる地味な研究を支えられないという視点をもっと持つべきであると考えます。
- ◆本来基盤となる運営費が全然足りないから間接経費が設定されているのに、それすら研究者の手元には来ない。機関の都合も理解できるが、研究費を獲得したら間接経費で研究代表者の環境整備するのは当然の話であるべきと思う。研究者裁量で一定の割合を使用できるよう、明文化してほしい。
- ◆現状、「基盤研究(B)」と「基盤研究(C)」の差が大きすぎるように感じる。運営費に期待できない以上、研究室の運営資金、という側面を科研費が持っている状態である。その中で、以前は「挑戦的萌芽研究」と基盤Bを併願できることがセーフティーネットとして機能していたと感じるが、「挑戦的研究」の採択率を半減した影響で、「基盤研究B」に挑戦するリスクがとりにくい状態になってしまっている。研究者によっては、「基盤研究(B)」と「基盤研究(C)」の間に若手PIの規模にちょうど良い金額があれば良いという意見や、種目の目的とはずれてしまうが、「挑戦的研究(萌芽)」の採択率を上げるべき、という意見もある。